翻刻　『悪源太平治合戦』（下）

翻刻の会

一、底本には大阪府立中之島図書館所蔵の七行九十丁本を用いた。

二、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、次のような校訂方針に拠った。

1　本文は文字譜を手掛かりにして、適宜改行を施した。ただし、道行・景事の類、会話の途中等では改行しなかった。

2　各丁の表・裏の終わりは、丁数の数字とオ・ウの略号を（　）で示した。

3　仮名は現行の字体に統一した。ただし、感動詞、送り仮名、捨て仮名の類以外の、本文中の「ニ」「ハ」「ミ」は「に」「は」「み」とした。

4　漢字は、一部の異体字を除いては、原則として通行の字体に統一した。

5　漢字・仮名ともに、誤字、脱字、当て字、仮名遣い、清濁は底本の通りとした。

6　特殊な略体、草体、合字等は現行の表記に改めた。

7　畳字は、平仮名は「ゝ」、片仮名は「、」、漢字は「々」に統一した。ただし、「〳〵」はそのまま残した。

8　文字譜の類はすべて採用し、本文の右傍の適切と思われる位置に翻字した。

三、本文の翻刻は、次に掲げる翻刻の会（学部学生の研究会）の会員によってなされた。

井原悠、平井淑子、八百板朋子。

文字譜、改行及び本文の最終確認は山田和人が担当した。

本作には、人権に関わる用語が認められる。資料的な性格を考えて原本の通り翻刻したが、人権問題の正しい理解の上に立って活用されることをお願いしたい。

（山田和人）

頼朝は見聞に付ケいとゞ。思ひは胸にせく。涙やるせも泣しづみ。しばしいらへもなかりしが。やゝ有て顔ふり上。拷問は慮。身は醢に成とても。兄義平の行衛は存ぜず。朝長といひ父上迄空しく討れ給ひし上は。最早片時も生ながらへる所存なし。サア〳〵早く首討て愁傷の根を断給へと。思ひ切ッたる御顔色。ホ、ウよい覚悟。義平が行衛しらざれば生置て益ない頼朝。ソレ〳〵難波首はねい。畏つたと立かゝれば。禅尼声かけ先ッ待テ〳〵。覚悟で討るゝ頼朝の。命かばふにあらね共。迚の事に義朝を長田庄司か討たる次第。汝くはしく聞しよし。（四十七ウ）語り聞さば其間に頼朝も暇を得て。一遍の念仏も父の手向と成へきぞ。早う〳〵と有ければ。難波は覚もしたり顔。忠宗が口うつしいかめしうこそ語りけれ。

いで其此は。平治元年臘月中旬。待賢門の軍破れて。左馬ノ頭義朝東国に落行給ひしが。尾州知多の郡。野間の内海の住人。長田庄司忠宗は御家人といひ鎌田が舅彼是遁れぬ縁により。館に入てしか〳〵の御頼。聞と等しく長田が悦び。かゝる時節なればこそ。身不肖の忠宗を御頼有こそ有がたしと。直に花麗の別家に請じ。善尽し美尽し（四十八オ）て霊ない饗応。義朝も安堵の日数送られしが。庄司心に思ふやう。当時盛の平家に背き。世になき源氏の大将をかくまひ達せば家の破滅。何とぞ儻討て出さんと。数多の家来に合せ。明れば正月三日の寿取納め。初湯をひかせ申さんと。前日より風呂屋をしつらひ。しめかざり引はへて。水走りの板かゞみの板冷水熱湯を汲ならべ。浴衣手拭湯上等入湯の具こと〴〵く。組竹の衣桁にかけ。御馳走の諸役人湯加減を試て。早御入と待かけしは。花麗にも又危けれ。

其時父に（四十八ウ）従ひし金王鎌田は有ラざるや。それはぬからぬ庄司が方便。若敵方より不時に寄んも計れず。金王丸見て参れと浜手に遣はし。聟の鎌田は大酒を好めば是幸イ。一ト間に招きひらじゐに。数献重て醉伏せためらふ内に。義

朝は浴衣一ト重に廊下を過キ。何心なく入給ふ。風呂屋の廻クりは組子共。我レ先キに押シふせんと手ぐむ手引て追ッ取リ巻ク。義朝驚きヤアラ心得ぬ長田が振舞。扨は心がはりよな。相伝の恩義を忘れ。主に敵対人面獣心。たばかられたかヱ、口惜やと。はかみをなして怒らるれば。忠宗ひるまずから〳〵と打笑ひ。昔は（四十九オ）昔今は今。威勢さかんの平家に従ひ討取ッて手柄にする。かゝれ〳〵の声につれ寄リくるやつ原事共せず。左右に摑んで投ケ付ケ。打付ケ人礫はらり。下はら〳〵〳〵〳〵ふるあられ。板屋にたばしるごとくにて手いたく働給へ共。多勢に不勢剰刃物一本ン有ラされば。心に任せぬたるみへ付ケ込ム組子共八方よりおり重る。義朝暫しと声をかけ。運尽て今死る共。此儘に討れんは。かばねの恥辱歎ケかはし。情に生害させてくれと。涙をながし頼まるれば。長田も不便と思ひけん。九寸五分の首掻刀。投ケ出せば追ッ取ッて弓ン手の脇腹。がはと突立テめてへきりゝと引廻せば。（四十九ウ）後に廻る忠宗が振リ上る太刀かげに。水もたまらず首討たりと。語れば頼朝ハアはつと。五臓をこがす悲しさに身をふる。はしたる無念ン泣。かゝる横死も平家の為。目前の怨敵討タで此儘果るは不孝恥を凌でながらへば二タ度源氏の代にかへし。長田を仕置にせん物と。即時にかはる心の励。人にしられじ悟られじと。面に隠し禅尼に向ひ。親兄弟爰かしこに討死し。某一チ人生キながらへる所存ンなけれど。せめては朝敵の名を取リ相果し。一チ門のぼだいとはん為遁世修業の志。御推挙有ッて我命御助ケ下されなば。生々世々の御ン情と涙と。倶にの（五十オ）給へば。禅尼は助ケかへしたき方便に望む物語。聞イてとゞまる頼朝の心一致に命乞。よき折からとすゝみ寄リ。ナフ清盛。今の願ひを聞れしか。出ッ家して一チ門のぼだいとはんとは。年シもゆかいでしほらしい。殊更家盛ににた頼朝なれば。わらはも一トしほ憐ふかし是非共助ケかへさるべし。頼ム〳〵と一向の。願ひに

清盛当惑ながら。ほゝ〳〵と打点き。ホウ御仰背にはあらね共。朝敵の躰を我儘に助る筋なし。善ン悪ヶ共に院の御所へ窺つて。御指図に任せ申さんと和らぐ詞に池殿も。少シ力ラを得給ふ所へ。瀬尾太郎兼康御前に罷リ出。仰付ケられし通り朱雀へ立越。（五十ウ）義平が種を懐妊の芙蓉と申ス女。詮義仕り候へば。鳥目五十銭の冨に入。則チ札に当りし非人に彼傾城を渡し。夫レより行衛存ぜぬと申ス。いかゞ仕らんといひも切せず手ぬるい〳〵。逃ヶ隠るゝ共天地の間。足限り捜出し男子ならば首討て見せよ。汝なれば構なし。いそふれ瀬ノ尾早来れと。凜々。魏々たる詞に恐れず池の禅尼。院の御所の願ひ立ツ迄頼朝はわらはが預る。といふて連レてはいなぬ。直ク に盛久に預け。粟田口の新ン館に指置ク程に。怪我遇もないやう。大切ッにしておくりやれと仁愛重き一チ言ンに横紙破リの清盛も。押シていはれずさから（五十一オ）はぬ。親の威光のかげ高く。かゝげ添たる玉だれの。雲井をうつす花の御所立チわかれてぞ三重へ帰りける。

忘れめや。萱が軒端と詠じたる遠江ノ国菊川の宿はづれ。諏訪の原の小百姓天目の弥源次といふ親仁有リ。八町礫紀平太が入聟したる舅にて。そこら名うてのいがみ者直クならぬ気に志す。仏ッ事供養の経営は。殊勝にも又いぶかしし。芙蓉は都に咲ク花も今はしほれし前垂かけ。紀平太が妹と形も所体も引かへて。客を儲のはき掃除。風巾に清むる皿鉢はかけた疵者娘のおさめ。生れ付キなる 唖 にて。諸事を仕形の取り捌仕舞（五十一ウ）為業と間敷。中に取まぜ。搗麦を箕でひる手品なよやかに。見る程惜き器量也。イヤ申おさめ様ン。けふはおまへのかゝ様ンの祥月キ命イ日。同行衆を呼ねばならぬ親仁様の云付ケ。追付ケお客も見へませう。大かたにして置カしやんせ。夫レはそふと死ナしやんしてモウ何ン年ンに成リますへと。尋ねれば両手を出し。十ヲの指をひろげて見せ。又引こめて今ン度は九つ。ム、十九年に成ルかいな。嘸や

生キてござんすなら其様不自由が苦にならふ。品かたちなら気達テならいはふ所のないおかた。ほんにどうしたはり合で。耳は聞へて物いはぬ。唖にはならしやんしたと悔を聞て。涙くみ。納戸（五十二オ）の方へ指をさし。我身を教傍に有ル。鉢と鉢とを打当テて。しほれし体にこなたも涙。ムウ何ンぞの罰が我身に当タり。此身に成ッたとおつしやるのか。ムウあきらめて居さしやんすが。一チばいいとしい〳〵と。思ひやりつゝ倶涙。奥より出る主ジの弥源次。底意路悪ルき面がまへ睨廻して座に直り。ア、又しても〳〵役にも立ぬ頑のくり言。小姑と借銭はないのがよいと世間の譬。いつからやらのら聟の門八が。都から連レて戻つた妹の喰つぶし。此辛い世の中に追イまくらふとは思はず。懇そふに点きさゝやき。大きなあほうの畸者と我レ娘にさへにく（五十二ウ）て口。おさめがつらさ気の毒さ其身は嘸と眺れば。あぢきなき世をしほ〳〵と。打恨たる気色にて指うつ。むきし折こそあれ。音もさへ渡る。尺八に一目を忍ぶ笠ふか〴〵。薦僧一人門口に報謝を乞て彳めり。何がな此場のつき汐によその思ひを汲み分ケて。心一ぱい指出す手の内を扇に情ケ。ハア御合力に預る上。近比申スはあこぎながら迚の事にお茶一トつ施に預りたしと。いふに内より弥源次声かけ。幸イけふは嚊が命イ日。薦僧も坊主の内。こつちへはいつて。ゆるりと茶でもたばこでもまいりませ。然らば御免ンと入風俗。小気味悪ルさにおさ（五十三オ）めが目くばせ。芙蓉もそれと悟しにや。ドレお茶上んとふたり連。顔を背て。奥に入ル

門内でも笠を取ぬが宗旨の掟。此儘暫時の足休めと。揚口に腰打かけ。天蓋のとぢめより見廻し見廻す曲者と。しらぬが仏の吊迚。程なく来る在所の同行四五人連。どや〳〵と入ルやいなや大あぐら。ア、毎年ン〳〵お祖母の命イ日。こちとらを呼とつつて。箸をとらす御雑作千秋万歳忝い。ナント彦作さふではないか。ハテ爰な庄屋殿は。祝言ン振舞に呼れたと思ふ

てさふな。けふは法事でこざるぞや。エッ此わろとした事が。夫レ程の事しらい（五十三ウ）で。村中のたばねがならふか。侮て羅ふまいぞ。ヤ侮るで思ひ出した。聞ケば是の聟殿門八が都から。よい女房な妹を連レ立ッで。あなどらせにわたせたと在所中の取ざた。殊に腹もぼてれんで居られるげな。品によつたら此庄屋が。マタあなどつてもおませうか。とふじゃ〳〵と世話やき顔。かけかまひなき薦僧も。様子いかにと吹ク きせる。

ム、時節からの掛人。纔な作りをする弥源次。目に立ッかして問て下さる。マアいづれも忝い。したが聟めが妹とぬかして直クは大きな偽り。どふでも何ンぞ尻みやの有そうな女良めじやてや。そりや又なぜに。サレバサ。妹でない証拠は。折々こかげで（五十四オ）主あしらひ。孕で居るを大事にかけ。若君の。姫君のと。とでもない事ぬかす故。君有ル人の娘かと気を付クればさふでもなし。立チ振舞のひつばなし。傾城くさい所も有リ。何にもせよ呑込ぬと。とうからおれも見付ケて居れど。腹ながきさへ産したら。胴空は今迄の飯代に売ル分別。もちつとじやと了簡して。高い物をくはせて置クと。咄す間に薦僧は。すつくと立ッて笠ぬぎ捨。相図の高音吹キ立れば。郎等信楽軍太を始め数多の家来一チ時に。爰かしこより顕れ出。庭に込入ル捕た声。同行中は恟りに物も得いはず逃ケ帰る。（五十四ウ）思ひがけなき弥源次が驚ながらさはがぬ顔。見向キもやらず上座に通り。梵論の姿と成ッたるはうぬらに油断させん為。誠は某平家の家臣ン。瀬ノ尾ノ太良兼康といふ者。清盛の上意を以ッて悪源太義平が胤を懐せし朱雀の傾城。芙蓉が行衛詮義の為。東国へ下る所。当所諏訪の原の百姓。弥源次方に都めきたる臈胎の女。五ケ月前より逗留と聞キしより。とくと実否を糺さんと思ひ。かくの通リ形をやつし報謝に事よせ。最前ンより窺ひ聞クに。朱雀の芙蓉をかくまひ置しは違ひなし。召捕て産落させ。男なれば首を討ッ。

（五十五オ）サア縄ぶつて手渡する。さもなくばふんごんで此方から縄かけふかサ、、何ンと。〳〵ときめ付る。身動きもせずせ、ら笑ひ。夫レ程になされず共。高が女ゴ独じやないか。仰山な詮義の仕様。併肝心勘文の。きめ所がもちつと楚忽な。イヤこいつ慮外の雑言。大概に割符が合ッたる故。連レ帰る瀬ノ尾ノ太郎。何を疎略ないへきかんと。刀に手をかけひしめくをサレバイナ。物体かうした科人ンには。身がはりの贋者のと。手をとらすが常の事。それと慥にしれぬ内。若贋者をひつとらへ。正真の芙蓉とやら。助ケ置カは後日の怨。なぜとつくりと吟味をとげ。まつことときやつに（五十五ウ）極らば臍胎の世悴。産落す迄待ッには及ばず。首討てお登なされい。ハテ母めさへ殺して仕し舞ば。腹ながきは持チ籠りの自滅も同然。何ンとさふでは有ルまいかと。邪見の詞を最前より。立チ聞クおさめが身に冷あせ。そゞがみ立てふるひ居る。兼康ほく〳〵打うなづき。ムウこりや尤。既に唐の老子とやらいふたわけ者。腹の中に八十年白髪になつて生まれしと聞及ぶ。其挌に隙取ッては。気がいれてこつちにたまらぬ。親を殺せばおのづから。小悴共にくたばるこんたん。面白し〳〵。イデ引出して一ト詮義と。かけ込ムをア、やすい〳〵。さふさはがしうなされては。風をくらふて逃ケ（五十六オ）走りしおるまい物でもなし。此親父に任さしやませ。正真か贋者か極めて上ケませう。ヲ、然らば暫く汝に預ケる。其間身は休足せん。必用捨致すなと。家来引連レ一ト間の内のさばりへ返つて入にけり。放逸無暫の弥源次は始終を独呑込で。納戸の内より引出す。芙蓉に引添おさめが歎ケき耳にもかけずがはと投ケ付ケ。コリヤ女郎よ。大方子細は聞たであらふ。ぐど〳〵問ても身の上を心安うはぬかさぬ頬付キ。そこを又骨折ずに詮義の仕様さまぐ有。儕レが首にかけてけつかる守り袋。子をなす程の義平なれば印シがなうては叶ぬ筈と。（五十六ウ）立寄て懐よ

り守リ袋を引出す。ノウ夫レは大事の物と取リ付ク芙蓉を突飛し。留る娘を片手に引居。見れ共〳〵是ぞといふ。証拠なければ靳しが。よし〳〵理詰や口先で白状はしおるまい。裏の畑へ引出しあたまから責せつてう。筋骨をひしいでいはせる。サアうせあがれと引立るをおさめが驚もぎ放し。中に隔唯おん〳〵。拝つ泣つ留めても。ヱヽ面倒な畸めとはり退踏退ケ聞入レねば。物は言たし言れはせず。詮方尽て有合ず尺八取リ上歌口を。露にしめせし一ト唱歌。夫に預る妹御の若や尋る人ならで怪我。過も有ルならは。身の言訳は何とせん。問事有ラは自が密に聞イて参らせん。お情有やとヽ様と笛の（五十七オ）呂律にあり〳〵と。言いたい事を吹分ケて。立ッたり居たり手を合せ涙。なからに願ひける。

弥源次つく〴〵耳そばだて。昔漢の臥龍先生。北狄を退治の時。士卒毒水を飲で唖と成ル。軍帥其故をとはん為。笛を吹カせて子細を聞ク。日本に万六笛にて物いふ事有リまつ其ごとくいはいで叶はぬまさかの為。尺ハと物書ク事ちいさいから習せてこましたが。今漸〳〵と役に立たな。いか様おれも年寄ッてむごいめは見とむない。そんならおれに成リかはりめろさいめに白状させい。ハテ褒美さへ下されたら親の物は娘の物。みんなそちがかはいさと猫なで声は狼の。ほへるより猶恐ろしき眼を。残しおくに入。跡にふたりは。顔見合せ胸撫おろすも暫し間や。心も心ならざ（五十七ウ）れば手を引かたへに伴ひて。身の上尋る尺ハの音色謎敷吹キなせり。とふもうし。とはぬもつらき梓弓。引カるヽ縁の。我なれば。心がヽりはなき物を。明カして聞せ給へやと物いふごとく問かけられ暫し。涙にくれけるが。辺を見廻し小声になり。日比から懇に真実見へし御ン情今迄包むも道ならねど。世を忍ふ身の跡やさき案じて夫レと打明ぬは。堪忍して下さんせ。成ル程瀬ノ尾が推量の通リ。悪源太義平様の胤をやどした芙蓉とはわたしが事。又おまへのお連レ合門八様ンは。もとが源氏譜代

の御家人ン。八町礫紀平太といふお方。待賢門ンの軍の後より。（五十八オ）連レ立のいて様々の御介抱。けふもけふ迚横須賀の明神へ。平産の祈禱にとて遙々の御参詣。其かひもなく見咎られ殺される迚是非もなし。去りながらいとしいはおなかの赤子。月日の光りが拝せたい。ならふ事なら此場の難義。救ふてたべと伏転び声をも。立テず泣居たり。始終とつくと聞すまし気遣ィなされな呑込ンだ。万ン事は爰にといふ事も心がせけば仕形もならず。胸を教ておん〳〵門幌の内へ押シ入〳〵。夫トの帰りを待チ兼て表テへ出たり引ッこんだり。狂気のごとく立騒ぎ途方にくれし折リも折。何心なく夫トの（五十八ウ）紀平太旅装束に菅笠の紐をとく〳〵立帰れば。としや遅しと走り寄リ奥の一ト間に指をさし。首打ッ真似や縛る真似。色々あせれど気も付カず。ナンジヤきやうとい顔付キして様々の仕形はすれど一トつも合点が行カぬ。マア気をしづめい何事じやと。落付ク程猶心せき夫トの菅笠ひつたくり。干たる麦を救ひ取リさび返し〳〵。向ふへ廻つて衿かき上。サア首討テといわぬ計リ合掌したる顔付キに。紀平太きよつと傍に寄リ。有ル箕ではさびもせず箕売は笠で物をひると。下世話の譬をして見せしは。ム、箕のかはりといふ身がはりに首討テといふ仕形かと。（五十九オ）いひも切ラぬにいだき付キ。ハツト泣出す大声は。悟る夫トの悲しさを思いやりたる涙也。

コリヤ泣ク計リでは子細がしれぬ。一ト筆かけよとせきにせいたる詞に点きすげ笠に。すくひたる麦かきならし指を筆。書クに気を付ケ読下タせば。瀬ノ尾太郎といふ侍妹御を芙蓉様とよう知ッて。とつさんとひとつに成リ首討ッとて奥に居ル。読も終らず気色をかへ奥へ切り込ム其勢ひ。あはてふためき取リ付クを。ヱ、邪魔ひろぐな畸者。舅成リ迚用捨はない兼康ぐるめ討チ放しお供して立退思案。爰を放せと振り切レば猶抱留片手にて。又かきならす笠の内。悪人でも親は（五十九

ウ）親。とつさんの命を助け私が首を身代の。御用に立テて下さんせと。夫トが読ば手を合せ。しやくり上たる心根を。思ひはかりて立留り。スリヤ其方は我々が身の上を委しく聞。是非に及ばず御身にかはり。兼康をたばかつて芙蓉殿の御命を助ケんと。思ひ詰ての願ひよな。思へば便なき事ながら。親の為夫トの為死ンでくれい女房と。むせ返ればむせ返り。とくより覚悟は極めても今更此世の名残かと。顔見ればかきくれて目も明キ兼し風情也。

紀平太は菅笠をおさめが前に直し置キ。言舌不自由にあらずんば言置ク事も有ルべきが。夫レさへ叶はぬ身の因果（六十オ）せめては是に遺言を書キ残せよと教れば。嬉しげに引寄セてなく〳〵つゞる言の葉を。涙ながらに読下す。神仏のお慈悲より有がたきは夫トの心。畸な我を年ンノ月の御不便がり。あいその尽たお顔も見ず可愛がつて下さんしたに今といふ今死ねばならぬ。品になる。命は惜いと思はね共お前独に別れるのが悲しうて〳〵。是ばつかりは迷ひの種。したがおまへもまだ若い身。鰥でも暮されまい。死ンだ跡ではわたしが様な畸でない。お内義様を呼しやんせずば成リますまいと。読内にふりあをのき。顔つく〴〵と打守れば。アノ訳もない心の疑ひ。アノ邪見な舅弥源次。（六十ウ）是迄永々かげに成リ日向に成リ。大分ン苦労に成ッた上。今日の只今では主君の命にかはるそなた。鬼畜の身でも此後チに女房が持れる物か。一ッ生鰥で暮すぞやと。いひも切ぬに縋り付キ。忝い共嬉しい共いはねどしれた泣声に。夫も涙とゞめ兼衿の。幾重かぬらしける。

いつ迄斯とかこちても果しなきとや思ひけん。歎キを留め座をしめて手を合せたる覚悟の体。今ぞ最期と観念し刀の柄に手をかくれば。ヤア夫レこそは無益の殺生紀平太待テと声をかけ。納戸の内より立出るは舅の弥源次。弓ン手に芙蓉が首

提馬手に用意の種が（六十一オ）島。火蓋を切て指向たり。
見るより夫婦は七転八倒早御首を討ッたるかと。かけよらんにも飛道具無念ンながらためらふ所へ。瀬ノ尾太郎兼康家来引具しのさばり出。ヲ、重々汝が働褒美は返つて都よりさたすべし。イデ請ケとらんと芙蓉が首面体とつくと見改め。したり顔にて立帰るを近ヵ比御苦労〳〵と目礼へ式礼門ト送リか油断を見せぬ種が島。跡をひつしやり指かため鐺しむる其丈夫さ。内にはおさめが有ルにもあられず夫の刀をぬくより早く。既に自害と見へけるを飛かゝつて弥源次が。ほでてんがうをまつるなと抜キ身をもぎ取りなげ（六十一ウ）付クる。とたんのたるみを紀平太は付ケ込ンで切かくる。さしつたりと筒にて請ケ留。ヤレうろたへ者。主人に手むかふ主殺しめと声かけられ。イヤ主人とはいづくの誰レ。たは言吐な老ぼれと又切リ付クるを飛しさり。此若君は主君に有ラずや眼つぶれと懐より。抱出せし稚子の初ッ声聞イて夫婦は恟り。何其世倅を若君とは。ヲ、忝くも清和天皇の後胤。左馬頭義朝の御ン嫡男。悪源太義平公。芙蓉が腹に懐されし若君の御誕生。産屋を見よとかけ上り。襖をさつと押シひらけば。円なる野面の石恭々敷（六十二オ）石碑に立テ。表テに彫たる五字の名号前には芙蓉が首なき死骸。脇つぼよりあばらをかけ切ひらかれて血まぶれ。見るもいぶせき其有様おさめは仰天紀平太も靭。果たる計なり。
弥源次は若君を包し儘に上座へ直し。遙下カつてどつかと座し。善の利益は目に見へねど。悪クの報は目前ンに。廻る因果を身の懺悔夫婦共によつく聞ケ。もと某は源氏相伝の侍猪股小平六といつし者。此若君には曽祖父君為義公の御不興蒙り。浪人のまづしき暮し女房が懐胎にて。臨月に及べ共木綿一ッ尺調置ク。始末（六十二ウ）もなければ諺にいふ貧の

盗。思ひ付ィたる街道の夜働き。十九年以前の今月今晩。此所に出往来を待ッ所に。年比は三十計リ容貌いやしからざる女。通りかゝるを褫とらんと。何ンの苦もなく討チはなし。衣類をぬがせ骸を見れば是も同じく懐胎にて。臨月共見へたりしを其儘に。埋しは則チ是成ル右の下。其夜我ガ女房も恙なき平産。我レは夫レより歯に血を付ケ。毎夜〳〵道に出旅人の通りを窺ふに。頬に赤子の泣ク声す。耳をすませば石の下合点行ずと掘かへすに玉の様なる女の子。疵の口より生れし体。ハア、よしなき事を仕出したり（六十三オ）と悔共詮方なく。連レ立帰つて子細を語れば常から心弱き女房。血の上の悔りにハツトいふて息絶たり。夫レよりふたりの乳呑子を育る方便に尽はてゝ。我子には印を付ケ街道筋へ捨子となし。彼土中にて生れしを育上ケたは是成ルおさめ。其後誰レがいふ共なく夜啼石〳〵と沙汰せらるゝがうとましさ。住家を爰へ移しかへ南無阿弥陀の五字を彫付ケ。朝夕の念仏もせめて後世を助ケん為。母の死血咽に入。耳は聞へて物いはぬ唖と成ッたる畸の娘。それ共しらず此親仁を誠の親と心得て。明ケ暮の孝行を請ケる程猶昔の（六十三ウ）悔。所に今日瀬ノ尾太郎討手に来る子細を聞ケば。重恩有ル主君の身の上。実否を糺し思案こそ有べきと。詮義すれば覚の有ル此守リ袋。扨こそ先ン年ン捨たる娘と初メてしつたる傾城芙蓉。然るにおさめが夫トが主君と聞しより。身がはりに命を捨んといふ健気さ。牛頭馬頭あほう羅刹でも何とてそれが殺されうぞ。とはいへ瀬ノ尾に芙蓉を渡されば。御ンいたはしくも義平公の御胤迄。敵の手に渡る物と慳貪邪見の指図をして。親が手づから首を討チ直クに腹をあばきしは若君の御命を助ケ申さん為斗リ。月こそあれ日こそあれ我カ手にかけし（六十四オ）おさめが母。祥月キ命ィ日のけふに当り一ッ生子しらず親しらず。適〳〵娘としりながらとつ様か我子かといふ間もなくむごたらしい。猟師の所作をして鹿猿か何ンぞのやうに。切さいなむも天の責廻る報ひの算用

ぞと。親の懺悔に身の上を聞イて驚くおさめが軟ケき。扨は我ヵ為親ならぬ親の恵の有リがたさ。拝む手先キにこもりつる。礼は涙の幾千度。さつしやりたるしやくり泣不便さ勝る鬼薊。しほれかゝりしごとくにてむせぶ。心の哀さよ。紀平太も涙をながし。聞及ヒたる猪股殿旧恩を忘れずして。適逢イ見る娘を殺し。若君を安穏に救ひ給ふは（六十四ウ）古今の忠臣。かゝる勇士の埋れて弓矢にかはる鋤鍬の。縁なればこそ親子となる八町礫が身の幸イ。生々迄忘れぬ大恩。此上ながら力ラを添若君の生立チを。御ン見届下さるべし偏に頼存ると。一向願へど返答も。指うつむいて居たりしが。ハゝア有リがたや添や。火宅を遁るゝ時来れり。聟や娘のわりなき頼もだしがたくは思へ共。罪業深き小平六。武士を立る所存はなし。今より菩提の門ンに入仏ッ道修業の志と。髻ふつつと押切〳〵。御辺は是より若君の御供して諸国の味方を駈あつめ。再び源氏の白旗を天地の間に吹キ靡せ。主君ンの汚命を雪むべし（六十五オ）愚老は此家に足をとめ。芙蓉が死骸も石の下タ。先キ立ッ人と一所に葬り夜の啼の石の跡絶ず。念仏するが亡者の為去ながら。初発心の掟にて魚鳥の肉を喰ふといふ。我は元来是迄に。多くの人を手にかけし大罪人。精進入にも殺生戒。仏に誓を是見よと。最前ンの種が島目当テは一ト間の障子の内。どうどひゞく引がねに思ひも寄ぬ信楽軍太。もんどり打てのたれ伏。夫婦是はと驚けば小平六筒投捨。最前ン瀬尾が帰りし時家来の不足。シヤ猿知恵にて忍びのやつを跡に残し置イたるとはよくしつたり。斯迄平家に油断なけれ（六十五ウ）ば。若君の御介抱おろそかには叶ふまじ。くれ〳〵頼むは娘が事みなし子の畸者。見捨てやつて下さるなとなく〳〵若君かき抱き。渡せばおさめが懐へ涙ながらに守リ奉り。立別れ行おし鳥の。尽ぬ思ひ羽打重ね。番離れぬ其中に。あたゝめ伴ふ雛鳥は浮木の亀や優曇花の。まれに遁れし御ン

命。追ッ付ケ四海に羽打て飛大鵬ならんと諫めても。諫上かひなき羽ぬけ鳥塒にとまる恩愛離別。互ィに恥らふ面と面。裏と裏とはかはかぬ袖涙の。干潟遠江。夜啼の石と代々を経て今に。古跡を残しける。（六十六オ）

第四

世は澆薄にうつるといへ共神は和光の塵を離れず。其垂跡を祈らんと悪源太義平は。鎧物の具爽に打挟弓に八幡山。都を西に遠近の便り求て行末は。流レも清き石清水。神垣近く成しかば暫く。幣を奉り。謹上。再拝。上〳〵。抑。我朝に二所の宗廟有リ。神風や伊勢に続て鳩の峯。日本ン第二の宗廟と。崇め敬ひ奉る。いともさかしき。武烈帝の御代に至て。王孫既に絶なん時応神帝に五世の孫名を。継体天皇と号し。廿七世をしろし召シ。夫レより（六十六ウ）代々に伝へ来て。天孫ン日次キの納る事。此御ン神の。いさおしなり。殊更弓矢を守りの威徳。我レも清和の台を出。祖父の家名を請ケ継で怨を千里の外に退。再び家を発さん事。一旬の内に得せしめ給へ。南無八幡大武神。帰命けいしゆ。敬つて白と丹誠無二の祈には心胃も。澄て殊勝なる。

時にふしぎや神ン殿の。扉ひらくと見へけるが。白髪たる老翁忽然と顕れ出。いかに義平。汝親子謀反に与し王法をかろんじ。朝敵神ン敵と成たれば非礼を請ケぬ神の法。先祖六孫王経基より。代々源氏へ授し弓矢。今義朝が無道によって。氏を汚し誉を失ふ氏神の怒（六十七オ）天の責。義平が携し。弓を請ケ取リ来るへしとの神ン勅。我レは武内高良の神ン早く弓矢を渡せよと相臾威風赫々たり義平大きに恐れ入。コハ思ひ寄ラぬ神ン勅かな。父こそ無道の名を取ル共。我々兄弟心を合わせ今一ッ戦に勝負を決し。家の汚名を雪がん為。扨こそ擁護を祈しに。我カ持チ弓迄召サれんとは。扨は源氏を見

限て。平家に渡し給はらば弥〳〵先祖の恥辱也。得こそ弓矢は渡さじと詞を放つて申さるゝ。いやとよ義平。三五夜中に照ル月も満ては闕る影を見よ。光陰矢よりも速に暫しはくもる村時雨。運つき弓の弦切レて。入ル野の鹿の命さへ野辺の草木も（六十七ウ）時を得ば。兵衛佐頼朝に。重て与へ授べしと。弓矢かなぐり高良の神ンもとの。官居に入レ給へば。つゞいて扉に入月の。かげも傾く手枕に眠りの夢は。へさめにけり。茶屋が葭簀の。内よりも。走り出る義平公。忙然と傍を見廻し。爰は正しく祇園の社。夢に見へしは弓矢神。八幡宮の宝殿にて。弓矢を神に取れじと誹ひの募る詞の内。兵衛佐頼朝にあたへる弓矢と宣ひしは。扨は怨を報はん者。弟頼朝にて有けるよな。去ルにても我々は父と一ッ所に名を下タし。倶に武運につき弓の矢武心も折レ果しと。悔の涙はら〳〵五臓をしぼる。計也。

跡を慕ふて。常世姫斯と見るより走リ（六十八オ）付キ。いつよりけふのお帰の遅い故。其気遣ィさ有ルにもあられず。サア〳〵戻つてくださんせ。アゝどふやらお顔の色も悪し。短気を出して下さんすな。朝内を出しましてもお帰りの顔を見る迄は。阿栗殿とふたりしてどふかかうかと物思ひ。御思案の入ル事なら。内へいんでもなりそな事といへど諾も。指うつむき。

夢の吉区善悪に迷ふ心も風さはぐ。真葛が原の人群集見付ケられては悪シからんと。姫を伴ひ義平は又も。葭簀に忍ばるゝ。群集に先キ立ッ。八丁礫紀平次が出立は。男自慢の丸裸百貫道具の力ラ持チ。片手ざしに指上クれば上に立ッたる牛若丸。直平頭巾に陣羽織薙刀（六十八ウ）かい込りゝ敷も。絵馬堂に。指かゝれば。数多の見物どや〳〵と社人交りに寄たかり。是が堺から来た梯子の曲。どんど〳〵と入ますの。サレバ〳〵。北野や稲荷にできたれど。根元は此男。エイ恰朴じ

やござらぬか。何が下から持上る。上では若衆が曲をする。是がほんの茶臼芸と。口々いへば紀平次は。梯子を突立こは作り。東西〳〵。扨是より本芸をお目にかけます。先ッは川原の涼なんど。珍らしい見せ物は多からふが。梯子の曲は今度が始め。六間二尺の長梯子。ちよぼ先に躰を立せ。小指に乗て指上ゝれば公輪魯般が雲にかけはし。天にも届く釣合かね合。上では居合片足だち。（六十九オ）とんだりはねたり踊ったり自由自在な鎌の所作。跡は三脚五挺立もつきやく梯子の始り〳〵。ヤ申〳〵。見れば太鼓を持てござるが。何と借て下さるまいか。おれ一人で打たり舞たり。囃子がなうてはいきにくい。ヲツト皆迄どんど、いふまい。お神楽所へ持ッて行がけ。そんならおれが打てやろう。是は重畳忝い。さらば梯子を始ふかと取りなをし指かくれば。禰宜は太鼓をうつの山蔦かづらの這ごとく。身はさゝがにの糸軽業。下にはあうんの力士立。或は頤肩車。秘曲を尽して〳〵見へにける。

時分はよしと相図のかけ声心得たりと手を延し。絵馬にかけたる太刀おつ取抜はなし。むさう返し現の太刀。（六十九ウ）光りは雷きり〳〵〳〵。小鮎さばしる山川に。鵜縄をさばく牛若丸錬磨を得たる太刀捌。数多の見物一同に。いや〳〵どつと。誉けるが。ナント見てか。二人ながらけうとい者の。身の軽さなら力なら。天狗の変化で有ふもしれぬ。ヤそれはそふと此十六日には。粟田口盛久の新屋敷で大踊が有げなが。平家の大将清盛様が。見物にござる故。惣体名有芸者を呼よせ御上覧に入るからは。此梯子も呼にくるでござらふと。いふをかしこに立聞義平。紀平次は梯子をおろし。先今日は是切りと。扇づかひにあせ入れば。又明日と打連て皆ちり〳〵に立帰る。

人間を待て義平公。走り寄て（七十オ）紀平次が峻はつしと踏倒し。刀のむね打りう〳〵〳〵。打れて驚く八丁礫。コハ

義平公にてましますか。何誤りに打擲と。いはせも立ず又ふり上畳かけて打給へば。姫も驚き走り出牛若丸も諸共に。留ても留らぬ血気の大将はつたとねめ。斯迄に世を忍び無念ンを凌は何ンの為。何とぞ本懐を達せんと思ふ所に儕が面を晒す計か。生先有牛若迄。倶に恥辱をあたへるは迚も傾く運を考。家を見限ての所為よなと以ての外の御怒。ヲ、お腹立は尤ながら。子細御存なき上は一遍申シ上ん。今日あらぬ姿と成。此所へ来る事弟志内が最期の砌。御下し給はりし

（七十ウ）膝丸の御ン佩清盛が手に入ッて当社へ奉納せしこそ幸イ。何とぞ神に預カり申再び御ン手に入レん為。今洛中にもてはやす梯子の曲に思ひ付キ。若君共言合せ仕終せたる今ン月只今。義平公は源家の嫡流。代々伝はる印シの太刀。おめ〳〵平家の宝ヲとならば弥〳〵源氏の武士共迄。二心を発すは必定。そこを存じて此年ン月無念をこらへし折も折。奉納せしこそ天のあたへ。牛若君の手をかつて。神の授る此御太刀。御請取リ下さるへしと。敬ひさゝぐる八丁礫。当タつて砕

始終を聞キ居る人々の。中に義平打笑給ひ。血気短慮の心より。見そんぜしは我誤り。細瑾を返り見ぬ紀（七十一オ）平次が心ざし。いか計リ祝着ぞと。太刀を取ッて頭戴有。今粟田口の噂を聞ケば。清盛が見ン物にて踊を催す一趣向。我レも前ぶり剃落し姿をかへて忍び入リ。頼朝を奪取リ家の敵父の怨。倶に天をいただかぬ清盛が首取ッて日比のもうむをさんぜんと詞にいさみ心には。弓矢神の夢の告明ケていはれぬ胸の闇。めかいの見へぬ老母も気遣ひ紀平次は立帰り。うばが介抱より〳〵には。味方を招く術をせよ急げ。〳〵と宣へば。紀平次ハット頭をさげ。粟田口へござらふ共。必短気は御無用〳〵。コレ常世様お頼申ス。ヲ、何ンの気遣イさしやんすな。仮にも婿也舅也粗忽な事はござんせぬ。（七十一ウ）案

内がてら付ィていて父上に直訴訟。頼朝様に逢せまんと牛若丸の御手を取リ既に別るゝ其所へ。以前ンの社人かけ戻り。コリヤ〳〵わいらは合点のいかぬ。奉納の太刀を下し居合につかふて剰持ッていのとは横着者。こつちへおこせといはれて紀平次空とぼけ。コレハ〳〵麁相千ン万ン。じたい躰が無調法。忘れて上つて誤りをくろめん為に大事の太刀。ついはづしたと見へました。どふぞかけて下さりませと。眴しかたを呑込ム義平。太刀を小脇に三人連レ足早にこそ帰らるゝ。

コリヤ〳〵男。幸イ様子も爰に有ル。上カつて見たいが成ルまいか。ハテどふでかけて羅はにやならぬ。そんなら早うといふ内に。太刀を渡せば提て爰を大事と（七十二才）二足三足。あがりかゝれど身はわな〳〵。央登てコリヤどふじや。扨は太刀を摺かへたな。ハ、、、ヤイ爰なうつそりめ。正真はたつた今親方に手渡しした。そこでゆるりと涼で居よと。

様子をくるりと打かへし。サア蜘舞の始り〳〵と笑ひて。こそは三重へ帰りけれ。

山城ノ国粟田山の要害は東海道の咽首にて。都をかためのの難所をひらき大路につらなる殿造。池殿の新宅とて主馬ノ判官盛久が。兵衛ノ佐頼朝を預カり置キし中カ屋鋪。けふ清盛の御入リと掃除の役は未明より。箒放さず打ッ水に池もかへほす計也。

比は文月十六日聖霊会の盂蘭盆と。きりこ灯籠さま〳〵をかけ（七十二ウ）ならべたる其中に。いたはしや頼朝公。過つる保元平治の軍に討死したる源家の一ッ門ン。分ケて御父義朝のあら聖霊を魂祭り。茶湯なり共備へんと臺子にたぎる湯玉より。わくかたもなき御心。汲てしらるゝ御風情。

盛久しづ〳〵と立出傍近く指寄て。初ッ秋の短日とは申ながら。囚れの御身なれば御退屈にも思召サんが。君にも御存しら

る、通り。清盛公の御弟先キ立チ給ふ家盛に御俤の似たる迚。御母公池の禅尼。世にいたましく歎ケきの余り。一向の御命乞心を尽し給ふ所に。十ヲが九つ御ン願ひ叶ふべき首（七十三オ）尾なる由。某迄おしらせあれば今暫しの御艱難と。申上グれば涙をうかめ。詞いかなる奇縁か。さす敵の子孫さほど迄情ケ有ル禅尼公の御めぐみ。頼朝生を隔共いかで忘れ申スべき。先キ連ッても申スごとく。親兄弟討死し。某一チ人甲斐なき命助る事本ン意とは存ぜね共。朝敵の名を取リ相果し。一チ門ンの菩提をとはん為。遁世修行の志。移りかはるは世の盛衰是も前世の約束と。思へばいとゞ御仏の縁によるこそ道なれと。世をあぢきなく見限し御詞。さへ哀なり。

詞ヲツヲ御尤なる御考心。殊更此池水は。御舎兄大夫ノ進朝長。（七十三ウ）都敗北の折柄膝の口を箆深に射られ。一ト足もすゝみ給はず。あの辺にて鏃を抜捨。御ン着長にまみれたる血を洗給ひしより。行かふ人の口すさみに血洗池と名付ケしを。詞幸イ拙者が支配所ゆへ。名将の御旧跡。馬蹄の塵に穢んは。便ンなき事とあらたに構へし此館。君とても逆縁ならず。懇に御ン跡をとむらひ給へと心を付ケ。倶にしほるゝ時しもあれ。よそは。うかるゝ踊声。ありやゝこりやゝ。アヤツトセイ。とちてんの三味も太鼓も。賑はしき。

地色ウ頼朝卿はいとゞ猶心おくれし折なれば。世のいさましさも羨れ御ン目に。うかむ露の玉。盛久それと思ひ（七十四オ）やり。詞今日は主人清盛。舟岡山へ廟参の帰るさ此所へ立寄リ。土民の踊を見ン物せんと兼て申付ケ置しが。彼者共の参りしやらん。盂蘭盆経にかゝれたる。如清涼地の踊リと聞ケば。是も則後世の経営。地色ッ付ケ主人清盛も来らるべし。倶に御覧じつれ〳〵を暫く慰ましませと。諫ながらに御手を取リ伴ひ。へ奥へ入相の。鐘に。つれ立ッ踊子は。伊達を浴衣の染模

様。四季の千種を色どりて。姿かたちもふりわけし。思ひ〳〵の物ずきに。踊手拍子うつゝなくしばらく時をぞへうつしけり。（七十四ウ）

伊勢音頭入江萩

三下リ哥中ウ
へかうたりや〳〵。しをんりんどうかざぐるま。あふぎ車に。水ぐるま。まはれやまはれおぐるまの。花見車に。御所車。
イセヲント中キン
へ伊勢の海。あまのまてかたまてしばしよび声とゞく人ごとを。たれにかつげの二つ櫛みつしほの。よるの車の我レからと。ないてわかれしきぬ〳〵の。袖よ袂ようらみわび。すへはどうなる事じややら。ヨイ〳〵〳〵〳〵ヨイヤサソレイ。こつ（七十五オ）ちはさはりのないみさほたゞ。一トすじに糸まきの。しめくゝりしてあひの手の。あふ時ばかり引よせて。ヨイ〳〵〳〵〳〵。ヨイヤサソレイ。うらむてんじゆのくだかけは。八こゑ八つぢにあけそめて。サア残る詞もかず〳〵の人目のせきを忍びごま。よい事ばかりゑ。
三下リ哥
へまてばかんろの日がらかさ。さしかけ。ハテナアサア〳〵。君に。かざす。袖がさひぢがさハテナア。サア〳〵。月も笠きてかよふらん。ふみは。いもせの。はしとはいへど。のゝのあはぬのとくぜつのたねに。顔はもみぢのはした（七十五ウ）なく。はもじ〳〵や。かさゝぎのはし。だます詞のはしとはほんにしらつゆの。ふみなかへしそまる木ばし。へあれ〳〵かねのこゑ〴〵いつもそひねのわかれぢゆふべ〳〵のむつごと。袖のしがらみいくゑのまがき。君にあふ夜のうき名はいやよとかく思ひの。まゝならぬ。
二上リ哥中ウ
へあみださまぼんのうじ。たんなうおしやうじやうねんぶつぢうぢはつち。コレ。〳〵〳〵〳〵入レやんしやう。御ゑかう。なむあみだぶつ。〳〵〳〵。なみだに（七十六オ）声も。しめ〳〵とのこるかたなきおんの程。コレ〳〵〳〵〳〵入レやんしやう。御ゑかう。へ詞それほうさんの

おつとめはへおんさもらさもらみもなんさあ。ゑんちうきちやんゑきちやん。なむおみたうふ。〳〵。へりんは松むしちりゝんりんへちうゑるすへんきぃいちやんせ。すちやんきィちやんゑんちゑ。なむおみたうふ〳〵〳〵〳〵へそれ〳〵〳〵。九ねんめんぺきあしにうちのりほつすをふり立。〳〵〳〵。〳〵これもほとけのさいどかや。（七十六ウ）奥より出る下モ部が声々。踊リの下ヲ見をなされしに殊の外お気に入ッた。清盛公の御出に間も有ルまじ。中入に小庭へ廻り支度せよとの御意なるぞ。早く〳〵とせり立テられ。皆我レ一と踊子共爐路の切戸へ入にける。

跡に残りし三人は辺を見廻し立集り。申シ義平様。けふの踊リを幸ィにマア爰迄は忍びしが。是からは頼朝様を盗出すが肝心〳〵。其上に首尾もあらば。久しぶりで爺様ンのお顔もちよつと拝たしと。いふをおさへて高い〳〵。汝が父盛久は。正しく敵の家来なれ共。さいつごろ相坂の関所にて。某と紀平次を見遁したる武士の情。おことに添も（七十七オ）其返ン礼。併互ィに隔る中対面は叶ふまし。頼朝さへ奪とらば牛若諸共裏門ンより。我に構はず密に宿所へ帰るべしと。の給へば常世の前。いか様おまへのおつしやる通リ。親子は内証表テ向キは敵味方。逢て悪ルくば逢ますまい。お詞を背ぬかはり。かんまへて持病の短気跡で発して下さんすな。わしはそれが気にかゝる。ハテ訳もない。今の平家の繁昌。雲を翔り地をくゝる程の勇力が有ルにもせよ。ひとりしての敵対は。石を抱て渕に入ルも同じ事。時節をしらぬ我レにはあらず。此方には気遣ィない。随分人に悟られな早う〳〵とせき給へば。牛若君おとなしく。兄様（七十七ウ）こつちも気遣ィない。踊リの紛れに最一ト人リの兄様連レてお先キへいぬる。お前は跡から〳〵と。常世の前を案内にて奥の小庭へ入給ふ。跡見送クりて義平は。御ン身にせまる憂思ひ。胸に満くる涙をおさへ。八幡宮の神ン勅にて。武運に尽しとしつたる某。頼朝さへ盗ミ

出せば運命はけふ限り。せめて敵清盛を一ト太刀恨て死ナん物と。覚悟極し我ぞとは。しらざる事の不便さよと。猛き姿も打しほれ暫し。イ給ひしに。憂を催す蛙の声。思はずかしこにあゆみ寄り。野辺に蛙の鳴声聞ケばありし昔が思はるゝと。歌にうたふもやすらはで。過キ越方の有様を。思ひつゞけし（七十八オ）心の哀さ。実誠此所にて。大夫の進朝長が。去ル平治の戦に膝の口を射られたる。鏃を抜キ捨。血汐を洗し跡と聞ク。主シは空敷成たれ共筐に残るは此池水。かげも形も写らぬかと。仁愛ふかき御涙やゝむせ。返り給ひしが。あたりにしげる。草葎より六尺計の大蛇声をしるべにねらひ寄ル。蛙は逃んづ気色もなく岸にひらりと上るを見れば。音トに聞ィたる三足にて睨詰たる眼の光り。赫々として星のごとく毒気を吹かけ飛付ク勢ひ。蛇も鱗を逆立テて尾先キにたゝく水煙。透間を窺ひ一ト呑と。紅の舌ひら〳〵互ィに諍ふ面魂。蠱毒の戦ひ是なんめりと。（七十八ウ）一ッ心ン不乱に守り詰盻もせず立給ふ。程なく両方にじり寄りすはや勝負と見る所に。蛙は前脚ふり上て蛇の頭を二つ三つ。打ッぞと見へしが骸をちゞめ。周章て元トの草葎へとしや遅しと逃ケこんだり。

義平横手をはたと打。ハツハ奇妙〳〵。蛙の三足なる物は。悪ク龍を退治すると。博物志には出され共。目ク前ン見たるは今が始め。さも有レふしぎと件の蛙。引摑んで御覧有レば三足にあらばこそ。前成ル脚に鏃を持チ腹に押シ当テ隠せし有様。扨はと鏃を引はなし蛙を池へ投ケ込ミ給ひ。武将たる身の賢愚得失。此利にはづるゝ事はなし。蛇の勢ひ強けれ共。鉄気を（七十九オ）以ッて防といふ。智謀に及ばぬよな。アツア是こそ弟朝長が。抜キ捨し鏃ならん。再び源太が手に入ル事。顔見るやうに思はれていとゞ涙のかげ写す。此池水にはらからの縁をひかるゝ弓矢の道。奇代の業を見し事よと忙然。として

立チ給ふ。

後の方に羽響高く。矢一つ来つて庭の立木にはつしと立ツ。ハツト驚立チ寄ツてよく〳〵見れば的矢也。扨こそ内通ごさんなれと。矢をかなぐつて見給へ共。矢文なければ眉をしはめ。烏羽を的矢なんどに矧ざるは弓矢の故実。ム、げに〳〵思ひ出したり。烏羽にかく言の葉といふ事あれば。子細は是にと鑵子すに向ひ。淫々と涌返り泫湯気（七十九ウ）にて羽を蒸。紙に写せば左リ文字。一ッ点違はず顕はれしは。悪源太義平牛若常世を引連レて踊に紛れ忍び入リしを見付ケしなり。搦捕て見参に入レられよ後詰には難ン波ノ次郎瀬ノ尾太郎兼康殿と。細字ながらもあり〳〵と読終て色も変ぜず。扨は源太が入込ミしを。早敵にしられしな。よし〳〵元トより覚悟の命。ちつ共驚く事ならず。敵の大将清盛に出ッくはせ。矢の一本ンも放さずして。討死せん事残ン念ンに有べきが。幸ィの此的矢と。くつ巻よりほつきと折リ以前ンの鏃をしつかとすげ。弓はなく共義平が此片腕こそ五人張。手突に成リ共最期の（八十オ）一ト矢。目に物見せんと小踊して今や遅しと。待ッ間もあらず。清盛公の御入リと表テに呼はる一ト声は。春を待チ得し鶯の初ッ音を聞キし其嬉しさ。いさみすゝんで前栽のしげみに。〳〵暫し忍ばるゝ。程なく来る乗物の。前ン後左右に近習小性礼義正しく付キ添ば。主馬ノ判官盛久御迎の為走り出。御慰の踊リ子共先キ達ッて召シよせたれば。直ク様奥へ御乗リ物参れ〳〵と声かけられ。お坪の内を廻り掾帳台深く舁込ば。盛久あたりに心を付ケ引添てこそ入にけれ。

義平木影を踊り出天にも上る心地にて。かけいらんとする所に。ソレ〳〵〳〵〳〵やつとせい。瀬ノ尾太郎兼康（八十ウ）古市伊藤五忠清。又こなたより難ン波ノ次郎根の井の大弥太。いづれも踊リの出立にて。平家に名を得し力自慢。我レ組と

めんと取巻たり。義平ちつとも驚かず。ハ、、、、あざ笑つて立給ふ。四人一度に眴し。踊リの拍子をかけ声に。ソレ〳〵そこらでせいと大弥太が。油断を見すます腕がらみ。もぢつてかゝるを打払ひ。ヲ、サテ合点じやコリヤ〳〵〳〵〳〵やつとやあ。ぶち付ケられてはしかみ頬。そつちでせいと尻込す。イデ伊藤五が間ぬけの拍子。ヤシツ〳〵。しづ〳〵しなへて柳でせいとしがみ付ク。ヲツヲ 逓 身ぶりは大名イ人ン。併踊リは音頭が大事。松坂よりは死出の坂。（八十一オ）こさせてくれんと弱腰つかみ目より高く指上て。一ト振ふつて七八間投ケ付ケ給へば飛石に。頭ぴつしやり打砕れあへなく息は絶てげり。

是にもこりぬ瀬ノ尾の太郎請取ッたりといふ儘に。向ふへ廻つてしつかと抱を諸手おさへの腕留。コレ〳〵〳〵〳〵〳〵ながしでこいと飜倒す。返してせいと起直り。ありや。〳〵。こりや〳〵〳〵まかせてな。おせ共ひけ共大盤石。ヨイ〳〵〳〵。よいやさッと蹴飛され。のめりを打ッにきよつとして。指詰跡は此難ン波。元来拙者は踊りが嫌ひ。誰レに成リ共渡したと言イ捨てこそ逃ケ行を。義平手早く矢を追ッ取リ。はつしと打たる手裏釵に。背骨より胸板迄（八十一ウ）たつた一ト矢にもんどり打チ。目計リきろ〳〵うごめくを。飛かゝつて足下にふまへ。志内の六郎景澄を。此義平と取リちがへ二条川原で討たる時。終には一チ念ン雷と成ッて引裂捨んといふたる由。其亡魂の鳴ル神也。思ひしれと両足摑。左右へさつと引裂給ふ。是を末世に誤つて。難ン波は雷に裂れしといひ伝へしも理り也。

所詮手取リに叶ふまし。ソレ討留メよと瀬尾が下知。畏て大勢が一チ度に抜キ連レ切ッてかゝる。悪源太は火雷神のあれたる勢ひ。うぬらに刃が入べきかと。大石樹木の嫌ひなく。手に当タるを幸イに引抜キ引上打付ケ給ふ有様は。氷をふらすが

ごとくにて。さしも（八十二オ）の大勢入乱れ爰をせんどゞ三重〳〵ふせぎしが。
大強力士の働きに何かはもつてたまるべき。皆ちり〳〵に逃ケちつたり。エ、ごくにも立ぬからくためらに詮もなき隙づいやし。目ざす相イ手は清盛一ヂ人。イテ見ンと参ンとかけ寄ル向ふの障子の内。思ひも寄ラぬ競瀧口牛若丸に縄をかけ。抜キ身を咽に指付クれば。同じくこなたに盛久も頼朝を高手小手。身動きせば只一ト突と眼コをくばつて立ッたる有様。見るよりハツト気もおくれ。ヤレ聊爾すな両人とあなたこなたを押シとゞめ価。果てぞおはします。
盛久さこそと声をかけ。池の禅尼の情によつて。此頼朝の命乞御聞キ届はあんなれども。（八十二ウ）悪源太義平討死とは偽りにて。此世にながらへ居るは治定。彼レを搦出すならば速に助クべしと。院の御所より綸命故清盛の御入リと偽リ。瀧口としめし合せ斯踊リを始めしは。貴殿ンをたばかり寄ん計略。所詮遁れぬ御ン命尋常に縄かゝられよ。夫レ共に得心なくば今頼朝を手にかけふか。ヲ、瀧口も其通り一ッ旦助ケし牛若丸。再び擒となられしは運の尽。生死は御ン身の心に有リ返答次第に討はなす。ナア〳〵〳〵と両方よりのつぴきならぬ手詰の場所。さしもの義平詞なく途方に。くれし御風情。頼朝卿どつかと座し。二人の命助からんとて現在の兄上。擒（八十三オ）にさせるは不孝の罪。天の冥罰恐ろしし。ヲ、それ〳〵。ながらへたり迚稚者共。兄様のかはりに死るは望む所。サア手にかけよ瀧口とおとなしやかに御兄弟。かくご極めし御ン顔ばせ孝心肝にめいずる上。思ひ出せし夢の告。八幡宮の御神ン託あたかも符契を合せしは。今此時の事なつしと。持ッたる的矢をからりと捨テ。ハツア天なるかな命イなるかな。生死盛衰は前生の禍福による。汝等は秀ずる運我レは傾く運命ィにて。身体髪膚今爰に滅する時節到来せり。サア縄かけよと後手に座をしめて待チ給へば。ホウ神妙〳〵。

御得心の上盛久が縄かく（八十三ウ）るには及ばね共。大法なれば力なしと兼て用意の縛縄。かゝる恩愛かけるも情。互の心ぞたのもしき。

斯と聞より常世の前人目も構はず転び出。ハツト計に縋り付キ正体。涙にくれけるが。漸に気を取リなをし。ふり返つてコレ爺様ン。わしが夫トはお前の聟。舅は親の慈悲もなく。踊リを始め清盛の上覧と嘘の有ル条拵事。ようも〳〵釣よせて手柄そふに縛しやんした。邪見な共どうよくな共人が聞たら誉ませうぞ。放逸むざんなとゝ様と恨。歎ケば。ヤアとゝ様とは誰ヵ事。此盛久に娘はないぞ。それ共是非我子なれば敵味方（八十四オ）と隔る中。未来迄ソレ夫婦にはなられぬがや。我レとても木石ならず一旦見遁し置ィたれ共。院の御所の厳命には慈悲も情も叶はゞこそ。大の虫を殺し小の虫を助ケ置キ。御出ッ家となせば院宣も背かず禅尼公の願ひも立チ。瀧口と此盛久が志も立ッ道理。ナ合点がいたか。ム、すりやどふ有ッてもお命は。助ヵらぬ〳〵。そんなら此世で添事も。叶はぬ事ならぬ事。ハテ夫婦は二世といふではないか。未来の縁をなぜ結ばぬ。ホンニそふじや。たとへおくれ先キ立ッ共二世の契りはたがへじ物と。懐剣逆手に抜キ放し。既に自害と見へければ瀧口かけ（八十四ウ）寄刀をもぎ。手早く捕縄しつかとかけ。朝敵の義平とかたらひし女。あたゝかに自害させふや。倶ともに御前ンへ引すへて首を刎る。とはする物の女なれば品によって助ヵるまい物でもない。其時は尼共成夫トの菩提をとふたがよい。ア、我レも人も娘を持此世で添れぬ夫トの為。眼ン前ン死るをとめもせず見殺しにする親の心。能似た事と存るから盛久の心のせつなさ。推量致いて居申スと。身につまさるゝ涙につれ。泣ぬ顔する盛久も目を摺こする計リ也。常世の前は顔を上。ア、有がたや忝なや。別れ〳〵に死んより夫ト諸共殺されて。死出の山路（八十五オ）も三途の川も

連レて渡るがわたしが本ン望。よう縛つて下さんしたといひつゝ見合す夫トの顔。身すぼらしげなしよげ鳥の番かゝりし捕縄を。はかなき身にし悦ぶは泣くよりは猶哀なり。

義平も打しほれ。やゝ御ン涙にむせばれしが。神ン明にも見離され。天より請たるいましめを悔にはあらね共。死スべき時に死ナざれば死にまさる恥有ルならひ。過キつる平治の合戦に討死をすべかつしに。八丁礫紀平次が諫を用ひ。無念ンの命を生キ延て。義平程の武士がかゝる縄目の恥辱を見る事。よつく武運に尽果しと御憤りを盛久が。思ひ（八十五ウ）はかつてずつと立チ。以前ンの的矢をひろい上。コハ心得ぬ御ン仰。悪源太義平公は待賢門の夜軍に。花々敷ク討死なされ名を一ッ天下に上給ふ。今又縄をかけたるこそ。盛久が館を騒し難波ノ次郎をあやめたる。仕組踊リの奴ならずや。其証拠には後代迄御名を包む為なれば。此鏃を印シに立。則チ爰を茶店にしつらひ奴茶屋と名を付ケて。往来の旅人ンに一ッ服の茶を施し。頼長公と御身の後世。御菩提の種を残さん是にて御心はれ給へと。申上れば御悦び。扨こそ末世に至る迄粟田口の奴茶屋。鏃を表テに錺しは此ことはりとしられたり。

契約なりと瀧口盛久（八十六オ）二人のいましめ引ほどけば。頼朝源太に打向ひ。君にかはつて我レ々が道ならぬ命助るも。一チ門を引接せん為。是より菩提の門ンに入難行苦行身をこらさば。法中の友帰依の僧俗。国々より集る事。稲麻竹葦のごとくせん。其時入院は高山林下牛若法師を先キとして。諸人を勧る出張をかまへ。誦経念仏の鯨波二六時中に鐘太鼓。乱調に打立〳〵。唐旗いほり幡のはた山の手に吹なびかせ。仏ッ敵大敵衆生の迷ひ悉さいどして終に名ィ眼名僧の。徳を四海に施す事頼朝が方寸ンに候と。仏ッ道修行によそへたる軍術勝てたくましき。（八十六ウ）義平すく〳〵勇をな

し。我レ今生の置キ土産初発心の銭別せんと。腰に帯せし一ト腰を牛若に取リつがせ。出家にいらざる賜なれ共。利釼即是弥陀号と聞クなれば。此一ト腰を枕に立テ悪鬼邪鬼を切払ひ。其身の守リに致せよと渡し給ふは祇園にて奪取リ置カれし膝丸の御ン佩。コハ有がたしと押シいただき。是今ン生の別れそと思へば目くれ心きへ。見かはす顔に百千行落る涙の諸袂引カる丶。名残しほる丶袖。帰らぬ旅に誘ひ行。

無常の風は時待タで。ちり〳〵ちらす哀傷離別。尽せぬ歎ケき取リに取伝へたる梓弓。当タつて砕る武士の義心ンにか丶る縛縄。死る計リか一ト筋の道有リ（八十七オ）頼み有リ明ケの。月もる庭に一ト踊リ。来て見よかしのやつこの此。奴姿を其ま丶に奴茶屋とて今の世も。残る鏃を印シぞと。見返り〳〵人々は立チわか。れてぞひかれゆく。

第五

龍蛇蟄して天上の時を待ツ事三千ン日。其済事大なりとかや。兵衛佐頼朝卿池殿の情ケによつて。御ン命助かり給ひけふぞ都を伊豆ノ国。遠流のさた極りしと。聞クと等く紀平太兄弟。若君をかき抱き御暇乞申さんと。急げば廻る湖の陸をいきせき瀬田の橋。暫く休らひ居たりしが。

数多の旅人騒立チ。ソリヤ囚人がもふ爰へ。くるは（八十七ウ）〳〵と声々に夕日まばゆき並松の。葉越にきらめく鑓印シ先キ備へのかちの者。往来を払ふ牢輿の跡に引添競瀧口。警固の役目おも〳〵敷ク心を。配てあゆみくる。

それと見るより小腰をかゞめ。暫時の対面希奉ると。いふに瀧口牢輿立させ。佐殿を出し参らすれば御ン前に畏リ。御ン命に恙なき段承はり。悦ぶ中にも遠流とあれば又御対面も叶ふまじ。せめては路次に待チ請御暇乞仕らん為参上と。

懐より若君の御顔を指向クれば。頼朝も涙をうかめ。詞ふしぎに命助るといへ共在俗の望なく。伊豆ノ国に着ならば。剃髪染衣の身となり一チ門の。菩提をとふ（八十八オ）のみ他事なしと打しほれての給へば。紀平太案に相違して無念ンの顔色見て取ル瀧口。詞ア、年シは寄ルまい物。此間はめつきりと目もかすみ耳も遠く。此湖の波音トさへ不通に聞へぬ。鉄聾同然なれば。何いふてもしらぬが仏。ちつ共遠慮はない事と。家来を遠ざけ片寄て。空耳つぶす情の程。紀平太はちかく指より。詞コハいひ甲斐なし我君。御父の仇をも討タず。此儘御出ッ家なされなば。数代つゞきし源家の破滅。形は墨に染給ふ共。かへつて不孝不義の大罪。御ン身一人リにせまるべし。危き命まぬがれ給ふは。御運めでたき瑞相。早く御謀叛思し召立チ給へ（八十八ウ）と。紀平治諸共すゝむれば。頼朝も気色を正し。詞今は何をかつゝまん。情有ル池殿の命乞を幸イに。出家を偽り助かつて。天の時地の理をはかり。亡父の怨を討チ亡し。ふたゝび源氏の代にかへさんと。思ひ立たる我所存ン。汝等ならで明カさぬ大事。当時平家の勢ひに草木も靡く時節なれば。必秘すべし〳〵と。の給へば両人も安堵の思ひをなす所に。間ぢかき森のしげみより責鼓責太鞁。風にこたまの梢をならし鯨波をどつとぞあげにける。人々驚き何事といふ間もあらせず瀬ノ尾の太郎兼康。手勢引ぐしかけ参り。詞送りの警固瀧口は院の（八十九オ）御所に仕へるといへ共。元ト源氏の侍なれば路次の間も油断ならず。斯あらんと思ひし故討手に向ひし某。先キ達ッて是に待チ請様子は聞た。謀叛人の頼朝主従瀧口ぐるめ討て取ル。覚悟ひろげと呼はつたり。紀平太兄弟まつ先キにつつ立。詞うぬが分際でいかめしく討手呼はり片腹いたし。幸イいだきし若君の母様芙蓉の敵討よい所へよふうせた。そつ首落すに手は見せぬうせい〳〵と抜キ放せば。家来は主を討せじと抜キ連〳〵切てかゝるを事共せず。

紀平次瀧口わつて入打合ヲ刃音てう〳〵。蝶鳥翅のかけりをなし四方八方じうわう微塵なぎ立〳〵三重へおふて行。（八十九ウ）

跡には紀平太若君いだき。片手に打あふ千ン変万化秘術を尽し戦ひしが。瀬尾がいらつて打刀紀平太ひらいてなぐる太刀。瀬ノ尾が左の高股をはらりずんど切落トせば。かつぱとまろぶをたゝみかけ。若君の手に持チ添たる刀にぐつととゞめの本ン望。軍勢残らず討取ッて紀平次瀧口立帰れば。頼朝様悦喜限りなく。瀬ノ尾が討ッ手は己がはからひ平家にしらざる事なれば。只何となく伊豆ノ国に向ひ。年ン内を経ず旗上せん。紀平太は甲斐ノ国紀平次は信濃路。いづれも軍勢駈催し不日にしらせあふべしと。いさみの詞くもりなき氏（九十オ）神ン擁護の恵にて。一ッ天四海をしろしめす智仁勇備の大将軍。其名も高き源トの誉は代々に炯然し。末栄へ行万々歳。天下泰平国豊竹の。一ト節千代こめて納る。御代こそめでたけれ

延享四丁卯歳

七月廿八日

並木周蔵

作者　安田蛙桂

浅田一鳥

（九十ウ）